

オバデヤ書「兄弟への反感」

1A ひどく蔑まれる者 1-9

1B 自分を欺く高慢 1-4

2B 欺かれる知者 5-9

2A 兄弟への暴虐 10-14

3A 主の日における報い 15-21

1B 神の御怒りの杯 15-16

2B 領地を所有するイスラエル 17-21

本文

オバデヤ書を開いてください、私たちの聖書通読の学びですが、先週アモス書を全て読み終えました。今朝は、オバデヤ書を全て一節ずつ見ていきたいと思います。オバデヤ書は、たった一章しかない短い書物ですが、ちょうど新約聖書のピレモン書のように神のご計画についての中核となる部分を、そのまま取り扱っている内容になっています。ピレモン書は、代わりに損失の代金を払うこと、つまり贖いがテーマになっています。ここオバデヤ書は、「神になるものに対する反感」がテーマとなっています。10 節に、「あなたの兄弟、ヤコブへの暴虐のために」とあります。ヤコブが神に愛され、エサウは退けられました。神に愛されていること、選ばれていること、神の所有のものとしてされていること、すなわち神ご自身の憐れみと愛に対して、それをプライド、高慢のゆえ受け入れられず、妬み、憎しみ、その不幸を喜び、あざ笑うような態度に対して、その高ぶりに対して、神がそのまま報いられるということです。

しかも、神の憐れみや愛を自分の近くで見れば、その妬みの思いは激しくなります。エドム人はエサウの末裔です。エサウが、ヤコブによって長子の権利を奪われて、祝福もヤコブが横取りをしたので、彼を殺したいと思いました。ヤコブが二十年後に母リベカの故郷から戻って来て和解をしましたが、それでも彼の子孫には、エサウがヤコブに見せたその妬みと憎しみが民族性の中に培われていき、その長い歴史の中で深い確執がありました。その頂点とも言うべき出来事が、旧約時代においては、バビロンによるエルサレムの破壊です。先に交読した詩篇に、「137:7 主よ。エルサレムの日に、「破壊せよ、破壊せよ、その基までも。」と言ったエドムの子らを思い出してください。」とありました。エドム人はユダと同盟を結んでいたにも関わらず、バビロンがエルサレムを破壊する時に、そこにやって来て彼らを助けず、むしろ彼らが逃げるのを妨げ、またバビロンがエルサレムを破壊するのを心から喜んでいました。そして新約聖書では、エドム人の末裔であるイドマヤ人がいます。ユダの南に住んでいましたが、その中の一人ヘロデ大王は、ユダヤ人の王であるキリストがベツレヘムでお生まれになったことを知って、二歳以下のユダヤ人の男の子を全て虐殺したことに現れています。

聖書には、同じように兄弟を憎んだ者がいます。第一人者はカインです。弟アベルの捧げ物を主が受け入れ、自分の作物は受け入れられなかったことに腹を立て、落ち込み、そして憎しみとなり、アベルを殺しました。そしてさすらいの人となりましたが、その子孫は暴虐に満ち、ノアの時代に大洪水で滅ぼされます。そして、イシュマエルがいます。イシュマエルは、アブラハムとサラの女奴隷ハガルの中に生まれた子であり、約束ではなく、彼らの肉の力によって生んだ子です。人間がどんなに努力をしても、神によるものでなければ、神に受け入れられません。そしてイシュマエルが、弟イサクの乳離れの祝いの時に彼をからかいました。それで追い出されたのですが、ガラテヤ書では、そのように肉の人は、御霊の人を迫害すると言っています。そして三人目が、エサウです。私たち人間は基本的に、このような妬みの文化の中に生きており、神によって生まれた者、神の愛を受けている者、神が行なわれていることに対して、その祝福を見て、妬み、憎み、高ぶる中に生きています。

主に贖われる、というのは、そういった汚れた世から救い出されることを意味します。テトスに対して、パウロが次のように書きました。「3:3-5 私たちも以前は、愚かな者であり、不従順で、迷った者であり、いろいろな欲情と快楽の奴隷になり、悪意とねたみの中に生活し、憎まれ者であり、互いに憎み合う者でした。しかし、私たちの救い主なる神のいつくしみと人への愛とが現われたとき、神は、私たちが行なった義のわざによってではなく、ご自分のあわれみのゆえに、聖霊による、新生と更新との洗いをもって私たちを救ってくださいました。」悪意と妬み、高ぶり、またその他の欲情の中で生きていたのですが、主の慈しみと愛が現れて、私たちを聖霊によって洗ってくださり、救ってくださいました。私たちはそうしたものから、自由にされています。そして私たちは、人々の敵意に対して、それを神の復讐に任せ、「あわれみ深い者は幸いです。その人はあわれみを受けるからです。(マタイ 5:7)」とイエス様が言われたように、憐れむように召されています。

1A ひどく蔑まれる者 1-9

1B 自分を欺く高慢 1-4

1:1 オバデヤの幻。神である主は、エドムについてこう仰せられる。私たちは主から知らせを聞いた。使者が国々の間に送られた。「立ち上がれ。エドムに立ち向かい戦おう。」

「オバデヤ」という名は、「主のしもべ」であるとか「主の礼拝者」という意味です。旧約聖書の中には複数の同名を持った人たちが出て来ますが、いずれもこの預言者のことではありません。彼がいつの時代に預言を行なったかは意見が別れますが、その一つは、紀元前 586 年のバビロンのエルサレム破壊の後で、同じバビロンによってエドムが破壊される紀元前 553 年の前ではないかという意見があります。なぜなら、この預言の内容が、エルサレムの破壊を心から喜んだことを主が指摘しており、そしてこの幻にあるようにエドムを外敵が攻めて来ることをオバデヤが預言しているからです。

オバデヤが今、幻を主から示されています。それは、主からの使者がエドムと同盟を結んでいる国々に送られています。そして、その国々の指導者に、「立ち上がれ。エドムに立ち向かい戦おう。」とけしかけている姿であります。そう、これがバビロン帝国であり、バビロンの支配下にあった国々がエドムと関係を保っていたけれども、それを破棄して裏切りエドムに攻め入っているのです。

1:2 見よ。わたしはあなたを国々の中の小さい者、ひどくさげすまれる者とする。

エドムは地上に小さい者となり、蔑まれる者たちとなって生きました。バビロンが攻め入った後に、今度はギリシヤ帝国も攻めて来ました。そしてその後に、アラビア系のナバテア人がエドムを徐々に押しやって、その首都ボツラから追放しました。彼らはユダの南に住み着きました。そして後に、ユダヤ人のハスモン朝のヨハネ・ヒルカノスによってユダヤ教に強制的に改宗させられました。そしてギリシヤ時代に、イドマヤ人と呼ばれます。ヘロデ家がイドマヤ人ですが、けれどもユダヤ人と同じようにローマに対して反旗を翻しました。ローマ総督ティトゥスが彼らを一扫しようとする。ユダヤ人も同じ目に遭いましたが、しかしその後イドマヤ人は民族として死に絶えます。

1:3 あなたの心の高慢は自分自身を欺いた。あなたは岩の裂け目に住み、高い所を住まいとし、「だれが私を地に引きずり降ろせようか。」と心のうちに言っている。1:4 あなたが鷲のように高く上っても、星の間に巣を作っても、わたしはそこから引き降ろす。…主の御告げ。…

エドムが滅ぼされた理由の一つは、ここにあるように「心の高慢」です。神に愛され、選ばれたヤコブを弟として持っていたのに、彼はその選びを拒み、自分たちの一族を誇っていました。エサウが移り住んだのは、セイル地方ですが、死海の南東部から紅海のアカバ湾にかけてのところ。海岸地域や低地を持っているイスラエルと異なり、その地域は褐色の岩の山脈が連なっているところであり、高地になっているところであり、言い換えれば、岩の山によって外敵から守られているところ。彼らの心は、「ヤハウエなど知らない。我々は岩に囲まれているから、敵が来ても安全だ。」という思いがあったのです。これはちょうど、海に囲まれているのでそれ自体が、大きな防護壁となっていて、外敵による侵略を受けにくかった日本列島と少し似ています。

ヨルダン旅行に行きますと、北から南に南下しますと、死海の南端のところに向かって、ゼレデ川の溪谷があります。その向こう側がこげ茶色の岩山がくっきりと見えます。そちらの方に入り、そしてさらにどんどん南下していきます。一時間半ぐらい走らせるのでしょうかダーナ自然保護区がらいます。そこが標高 1500 ㍎で、一気にマイナス 50 ㍎と降りていくようなトレッキングの道があります。一挙にイスラエルのアラバ溪谷のほうへ向かうのです。そして、さらに 1 時間弱走るのでしょうか、世界遺産になっているペトラに到着します。ペトラは、本当に岩山に囲まれた盆地のような感じになっています。入口は、小さな自動車も通ることのできないような狭い小道しかありません。ですから、そこを首都としていたエドム人は、その「岩の裂け目に住み、高い所」として、自分たち

を地に引きずり降ろすことをだれができればか？と思っていたのです。

エドムはこのような自然の要害によって守られていましたし、また紅海とダマスコの間をつなぐ王の道もあったので、貿易によって豊かになっていました。ですから、まさか攻め入って来ることはできないと思ったでしょう。けれども、文字通り、彼らは地に引きずり降ろされたのです。イスラエルのほうのユダの地の南のところに移住せざるを得なくなりました。ですから、主は必ず、高ぶるものを引き降ろします。

2B 欺かれる知者 5-9

1:5 盗人があなたのところに来れば、夜、荒らす者が来れば、あなたは荒らされ、彼らは気のすむまで盗まないだろうか。ぶどうを収穫する者があなたのところに来るなら、彼らは取り残しの実を残さないだろうか。

主が、エドムが行なったことがいかに異常かを、盗人との比較で言い表しています。新改訳では、「気のすむまで」と訳されていますが、フランシスコ会訳という、カトリックの翻訳では、「必要なだけ」と訳されています。いかがでしょうか、自分たちが取りたいだけ、その必要な分を盗みます。けれども、エドムがこれまでユダの国、そしてエルサレムに対して行なったのは、尋常ではありません。根こそぎ、彼らのものを奪い取ったのです。10 節以降に、エルサレムの中に入っていく彼らの姿を読むことができます。ぶどうの収穫でも、取り残しの実はあるものですが、エドムはそのようなことを許しませんでした。それは、エドムがそれだけイスラエルを憎んでいたからです。私たちが先に学んだアモス書には、「1:11 彼(エドム)が剣で自分の兄弟を追い、肉親の情をそこない、怒り続けて、いつまでも激しい怒りを保っていたからだ。」とありました。その異常な様子は、実際のユダヤ人に対するかつてのナチス・ドイツ、そして今のパレスチナ人によるユダヤ人を憎むように学校で教えられているところに、見るすることができます。そして私たちは、いつまでも憎むという、感情の制御のできない世の中に生きていないでしょうか？こうした思いから、守られるように祈るばかりです。

1:6 ああ、エサウは捜し出され、その宝は見つけ出される。

ここに、はっきりと「自分のしたことに対して、その仕打ちを受ける」という原則があります。エドム人がユダヤ人から根こそぎ取ったので、彼らも同じように探し出され、見つけ出されます。人を裏切る者はそのまま、他の人から裏切られます。人の陰口をたたく者は、自分自身が陰口をたかれるようになります。人を憎む者は、人々から憎まれるようになります。自分が人のものを奪うなら、自分自身が奪われるようになります(参考:イザヤ 33:1)。

1:7 あなたの同盟者がみな、あなたを欺き、あなたを国境まで送り返し、あなたの親しい友があなたを征服し、あなたのパンを食べていた者が、あなたの足の下にわなをしかける。それでも彼はそ

れを悟らない。

これは見事に、エドム王国がナバテア王国に取って替わったことによって、成就しました。今のペトラに行きますと、そこはナバテア王国の遺跡に満ちています。僅かに、エドム人の村落の遺跡がひっそりとあります。ナバテア人は、アラビア系の遊牧民であり、シルク・ロードならず、「香の道」と呼ばれる、香辛料を中心にした貿易をアラビア半島をその周辺地域で発展させましたが、紀元前6世紀頃からボツラに住み始めました。そして次第に豊かになり、初めはエドム人から便益を得て、エドム人の下で暮らしていたナバタイ人が力を持ち、立場が逆転してそれでエドム人は追われる身となっていったのです。ここに、「あなたのパンを食べていた者が、あなたの足の下にわなをしかける。それでも彼はそれを悟らない。」とありますが、エドム人は自分たちがそのように裏切られていたということ、次第に行われていたので気づかない、悟らないでいたのです。

1:8 その日には、..主の御告げ。..わたしは、エドムから知恵ある者たちを、エサウの山から英知を消し去らないであろうか。1:9 テマンよ。あなたの勇士たちはおびえる。虐殺によって、エサウの山から、ひとり残らず絶やされよう。

エドムには、「テマン」というもう一つの大きな町がありました。ボツラの東あるいは北のどちらかにあったと言われています。そこは学術都市としての誇りを持っていました。「テマン」はエサウの息子エリファズの子の名前から来ています。苦しんでいるヨブを訪問した友人の一人が、「テマン人エリファズ(ヨブ 2:11)」でした。彼は知恵のある人であると自負していましたが、それはテマン出身だからです。その知恵も役に立ちませんでした。そして、勇士たち、つまり頼りにしていた武力をも役に立ちませんでした。次の、エレミヤの預言を思い出します。「9:23-24 主はこう仰せられる。「知恵ある者は自分の知恵を誇るな。つわものは自分の強さを誇るな。富む者は自分の富を誇るな。誇る者は、ただ、これを誇れ。悟りを得て、わたしを知っていることを。わたしは主であって、地に恵みと公義と正義を行なう者であり、わたしがこれらのことを喜ぶからだ。」

2A 兄弟への暴虐 10-14

1:10 あなたの兄弟、ヤコブへの暴虐のために、恥があなたをおおい、あなたは永遠に絶やされる。

エドムが兄弟ヤコブに対して行なった暴虐について、永遠に絶やされるとまで厳しい宣告を主が下しておられます。主は、兄弟の結びつきについて、また自然に与えられている結びつきや絆について、平和のためにそれを尊重することを願っておられます。モーセが率いるイスラエルの民が、荒野の旅をしている時に、エドムを通過する許可を取ろうと思った所、彼らは通らせることなく、かえって戦おうとさえしました。けれども主は、彼らに対して戒めていました。「申命 2:5 彼らに争いをしかけてはならない。」と主は言われました。そして、「23:7-8 エドム人を忌みきらってはならない。

あなたの親類だからである。エジプト人を忌みきらってはならない。あなたはその国で、在留異国人であったからである。彼らに生まれた子どもたちは、三代目には、主の集会にはいることができる。」ここまで主は言われていたのです。私たちは、肉の家族であっても、同じ民族であっても、そしてもちろん神の家族である教会であっても、互いにつながっているのだから、憎しんではならない、忌み嫌ってはならないと言われています。近い間柄ですと、その確執も激しいものになります。が、それでも私たちは、近くにいる人々と争ってはいけないと戒められているのです。

しかし、エドムはやってはならないことをしました。主はここで「暴虐」と呼んでおられますが、エドムが行なったのは基本的に、「助けなかった」ということです。兄弟ヤコブの子孫、ユダヤ人が虐げられている時に、敢えて助けなくて傍観することによって暴虐を働いていたのです。これは、「やらないことによる罪」です。「ヤコブ 4:17 こういうわけで、なすべき正しいことを知っていながら行なわないなら、それはその人の罪です。」

1:11 他国人がエルサレムの財宝を奪い去り、外国人がその門に押し入り、エルサレムをくじ引きにして取った日、あなたもまた彼らのうちのひとりのように、知らぬ顔で立っていた。1:12 あなたの兄弟の日、その災難の日を、あなたはただ、ながめているな。ユダの子らの滅びの日に、彼らのことで喜ぶな。その苦難の日に大口を開くな。1:13 彼らのわざわいの日に、あなたは、私の民の門に、はいるな。そのわざわいの日に、あなたは、その困難をながめているな。そのわざわいの日に、彼らの財宝に手を伸ばすな。1:14 そののがれる者を断つために、別れ道に立ちふさがるな。その苦難の日に、彼らの生き残った者を引き渡すな。

主は、バビロンがエルサレムを破壊した日を、「その日」として何度も繰り返しています。主ご自身が、その日を定めておられたからです。ユダヤ人が神によって裁かれる時、懲らしめられるその時に、エドムは自分の怒りと憎しみを余すところなく表したのです。元々、エドムはこの時にユダと同盟を結んでおり、バビロンに対抗しなければいけないはずでした。それをここに書かれているように、エルサレム破壊に加担したのです。

主は各々に対して、公正な取り扱いをされます。そして主があることをある人に対して行なわれる時に、何をしなければいけないかと言いますと、恐れることです。主を恐れかしこむことです。どんなことがあろうとも、主が裁かれている時にそれに加担してまるで自分が神であるかのように、上から目線で裁き、その裁きに加担するようなものなら、エドムと同じように自分自身に裁きを招いてしまいます。主が、ユダヤ人の多くが不信仰で、異邦人がかえって信じるようになったことについて、高ぶらないでかえって恐れなさいと戒めました(ローマ 11:19-22)。主によって取り扱いを受けているのですから、私たちのすることは神を恐れ、またできることなら、その人たちに近づくことです。慈しみを示すことです。もうその人は、神によって自分が裁かれていることを知っています。

3A 主の日における報い 15-21

1B 神の御怒りの杯 15-16

15 主の日はすべての国々の上に近づいている。あなたがたのように、あなたにもされる。あなたの報いは、あなたの頭上に返る。1:16 あなたがたがわたしの聖なる山で飲んだように、すべての国々も飲み続け、飲んだり、すすったりして、彼らは今までになかった者のようになるだろう。

「主の日」ですから終わりの日におけることです。ここではエドムだけでなく、エルサレムを我が物にするすべての国々に対して、主が報いられることを話しています。ゼカリヤ書 14 章によると、エルサレムがすべての国によって荒らされます。ヨエル書においても、イスラエルの地に対して諸国が行ったに対して、主が裁かれることを私たちは読みました(3:2-3)。ここで国々が「飲み続け、飲んだり、すすったり」するとありますが、これは神の怒りの杯を飲むということです(黙示 14:10 参照)。エドム人、また他の異邦の諸国がエルサレムにおいて、ぶどう酒を飲み交わしたのでしょうか。けれども、同じ杯でも、神の怒りの杯を飲み干すということです。エルサレムに対して与えたのと同じ苦しみを、彼らが受けるということです。

2B 領地を所有するイスラエル 17-21

そして次からエドムではなく、イスラエルの残された者たちに対する預言が始まります。これだけの酷い仕打ちをエドムから受けたのですが、彼らはその怒りを主に任せなければいけません。復讐は主がしてくださることです。それよりも、自分たち信じる者たちに約束されている神の相続に心を留めるべきです。私たちも、信仰生活を歩んでいる中で反対する力を受けます。しかし、その反対の力に注目するのではなく、主の約束を見上げます。

1:17 しかし、シオンの山には、のがれた者がいるようになり、そこは聖地となる。ヤコブの家はその領地を所有する。

山上の垂訓において、八つの幸いについて主が語られた時、それは御国とこの世の逆転のことを教えられました。貧しい者は幸いである。けれども今富んだ者は災いである。悲しむ者は幸いである。そして、「柔和な者は幸いです。その人は地を相続するからです。(マタイ 5:5)」と主は言われました。力のある者、知恵のある者がこの世においては多くのものを手にするのですが、その反対にへりくだる者、復讐しない者こそが神から大きなものを任されるということです。ここでの、イスラエルの逃れた者たちは残された者たちです。彼らは大患難の中で多くの苦しみを受け、主の前にへりくだり、救いを求めた者たちです。その彼らがエルサレムの至福にあずかる第一の者たちになります。

そしてエルサレムは「聖なる地」となります。聖なる者だけが入ることができるのがシオンです。ダビデは、誰が聖なる山に住むのでしょうか、という祈りを捧げています。詩篇 15 篇ですが、そこ

にこうあります。「15:2-5 正しく歩み、義を行ない、心の中の真実を語る人。その人は、舌をもってそしらず、友人に悪を行なわず、隣人への非難を口にしない。神に捨てられた人を、その目はさげすみ、主を恐れる者を尊ぶ。損になっても、立てた誓いは変えない。金を貸しても利息を取らず、罪を犯さない人にそむいて、わいろを取らない。このように行なう人は、決してゆるがされない。」聖めへと進む者たちが、ここにあるような永遠の命と相続に預かります。

そしてヤコブが、主によって与えられていた領地を所有します。領地であるということ、所有するという事はまた別問題ですね。イスラエルの民は、モーセを通して与えられていた相続の地の全てを、所有したことがほとんどありませんでした。ヨシュア率いるイスラエルの民は攻め入りましたが、信仰によって戦わなかったのです。全うしませんでした。しかし終わりの日に、その所有が完成します。私たちにも、キリスト者に与えられた約束を所有しているでしょうか？知っているけれども、それを自分のものとしているでしょうか？そのギャップを埋めるのが信仰であります。聖霊の力によって自分の所有とすることができます。

1:18 ヤコブの家は火となり、ヨセフの家は炎となり、エサウの家は刈り株となる。火と炎はわらに燃えつき、これを焼き尽くし、エサウの家には生き残る者がいなくなる、と主は告げられた。

主が、イスラエルのために戦ってください。彼らが戦う時に、主が彼らの先頭に立って戦ってください。それを「火となり、炎となる」と呼んでおられます。「ゼカリヤ 12:4-6 その日、主の御告げ。わたしは、すべての馬を打って驚かせ、その乗り手を打って狂わせる。しかし、わたしは、ユダの家の上に目を開き、国々の民のすべての馬を打って盲にする。ユダの首長たちは心の中で言おう。エルサレムの住民の力は彼らの神、万軍の主にある、と。その日、わたしは、ユダの首長たちを、たきぎの中にある火鉢のようにし、麦束の中にある燃えているたいまつのようにする。彼らは右も左も、回りのすべての国々の民を焼き尽くす。しかし、エルサレムは、エルサレムのもとの所にそのまま残る。」主はこのように、敵に対して圧倒的な勝利者となってくださいますね。

1:19 ネゲブの人々はエサウの山を、低地の人々はペリシテ人の国を占領する。また彼らはエフライムの平野と、サマリヤの平野とを占領し、ベニヤミンはギルアデを占領する。1:20 イスラエルの子らで、この壘の捕囚の民はカナン人の国をツアレファテまで、セファラデにいるエルサレムの捕囚の民は南の町々を占領する。

ユダヤ人が攻め込まれて、踏みにじられていた周囲の敵が持っていたものを、イスラエルに住む者が占領するという約束です。南部の沙漠、ネゲブの人たちはエサウを占領します。低地、これはシェフェラと呼ばれるところで、ユダ山地の南部と地中海沿岸の間にある地域ですが、しばしばペリシテ人の攻撃を受けていました。その人々はその地中海沿岸に移住していたペリシテ人を占領します。そしてエフライムとサマリヤの地域、今の西岸地域ですが、そこを彼らは奪還します。

それから、ギルアデはヨルダン川の東岸地域で、ガドとマナセ半部族の相続地でしたが、そこも取り返すことができます。

さらに、「ツアレファテ」はレバノンにある町です。つまり、周囲の地域にまでイスラエルの所有が広がるということです。そもそも、アブラハムに主が約束されていたのはユーフラテス川からエジプトの川まででありました。そしてモーセが示した所有地も、やはり北はレバノンとシリアを含むユーフラテス川上流地域から、エジプトのそばまでです。そして、「セファラデ」がどこであるかは、意見が分かれています。今のユダヤ人で、長いことスペインや北アフリカの地域にいたユダヤ人のことを「セファラディ系ユダヤ人」と言います。そこでスペインではないかという人たちがいます。またある人は小アジアのサルディスではないか、という人もいます。しかし、そのような遠く離散している民が、南の町々、すなわちエジプトのほうにある町々まで占領するということです。

これは、人間と人間の戦争や占領のことを考えてはいけません。そうではなく、主の与えられた地に、主のものとした民が留まることを意味しています。主にあつて、これらのものを自分たちの所有地として主張するのです。そして、これらの人々をむやみに滅ぼすではありません。主のものとして主張して、主の支配の中に入りたい人たちとは共存します。詩篇 87 篇にこう書いてあります。「87:1-6 主は聖なる山に基を置かれる。主は、ヤコブのすべての住まいにまさつて、シオンのもろもろの門を愛される。神の都よ。あなたについては、すばらしいことが語られている。セラ「わたしはラハブとバビロンをわたしを知っている者の数に入れよう。見よ。ペリシテとツロ、それにクシュとともに。これらをもここで生まれた者として。」しかし、シオンについては、こう言われる。「だれもかれもが、ここで生まれた。」と。こうして、いと高き方ご自身がシオンを堅くお建てになる。主が国々の民を登録される時、「この民はここで生まれた。」としるされる。」他の国々も主の前に服従するのであれば、主の民として登録されるということです。

1:21 救う者たちは、エサウの山をさばくために、シオンの山に上り、王権は主のものとなる。

ここの、「救う者たち」というのは、士師のような存在です。士師たちが、外国の民に虐げられていた時に、主に拠って立ち上がり、戦って、そしてイスラエルを救いました。かつては、エサウが自分の山からシオンの山に上って来て、彼らを虐げたのですが、今は、救い者たちがシオンの山に立って、それからエドムの山を裁きます。この「裁く」というのは、治めるとも言える言葉でしょう。自分たちが主を王とするその基準でもって、エサウの山も量られるということです。王権が主のものであり、神の国が広がっているのですから、神を王とする者たちが共に世界を治め、裁きます。

キリスト者は、王となり、神のために祭司となる存在です(黙示 1:6)。神を代表し、それから神を王とすることによって、他の人々が神の支配の中に入るようにさせます。私たちが今、周りの人々への証しを立てているのでしょうか？イエスが生きていることを示しているのであれば、聖霊の

力によって示しているのであれば、それによって人々は、神の憐れみを知って、自分もへりくだり、救われるか、あるいはエドム人のように拒んで、妬み、憎しんでしまうのか、二つの選択があります。私たちはいずれにしても、主にあって立てられた証し人であり、その生きた証しによって神の国が広がってきます。